

## CNAC 第 15 回全国フォーラム

「With コロナ時代の海の楽しみ方―全国海自慢―」

日時：令和 2 年 11 月 28 日(土) 14:00~17:00

場所：Zoom によるオンライン開催（本部：みなと総研会議室）

主催：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会

後援：国土交通省港湾局、一般財団法人みなと総合研究財団

### ■開会の挨拶

**スピーカー：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好 利和**

2020 年に入り、新型コロナウイルスに関して、我々体験活動のメンバーも、春先からいろんな状況の中で、結果としては夏、そして秋と、それぞれの団体・メンバーが工夫をしながら、海辺での体験活動を実施してきている。いろんな状況の中で、我々の活動が、いろんな人たち、特に青少年に対して必要であるとの認識、想いを持って、活動を自粛するのではなく、期待をしている子どもたち、青年、大人たちに対して、活動を提供していくことが使命なのではないかと、現在も海の活動を続けている。

本日は、海での活動の様子を、オンラインというシステムの中で、動画を共有することで、北は北海道から、南は沖縄まで、紹介を予定している。それぞれの団体・活動者の皆さんが、現在どのような形で実際に行動されているかを、いろいろと意見交換をしていく形で今年度の全国フォーラムは実施する。オンラインなので、逆に顔が見易く、全員が顔を見ながらグループディスカッションもする形になるので、積極的なご発言をお願いしたい。この時間が有意義になることを願っている。

### ■来賓挨拶 1

**スピーカー：国土交通省 港湾局 海洋・環境課 港湾海洋政策室長 白井正興様**

CNAC の皆様におかれましては、日ごろから国土交通行政、とりわけ港湾・海岸行政に格別のご支援・ご協力を賜りありがとうございます。このコロナ禍においても、積極的に海辺の自然体験活動を継続されているとのことで敬意を表します。むしろこのコロナ禍の元、アウトドアがまた見直されているとのことで、より活動が活発化することと期待している。

最近のトピックとして、当方で検討している一つにブルーカーボンがあり、この 7 月にブルーカーボン研究会を立ち上げた。ブルーカーボンの生態系については、アマモ、ワカメ、コンブ等、海辺の干潟・浅場における Co<sub>2</sub> の吸収量を計上し、地球温暖化対策として、Co<sub>2</sub> 削減値の中に具体的に取り込もうという動きがある。先日、2050 年までに Co<sub>2</sub> 排出量実質ゼロが打ち出された中で、海辺、

浅場が、我が国の Co<sub>2</sub> 削減に貢献するということを数値的にこれから明らかにしていきたいところ。

こういった中で、海での自然体験活動で、より海を理解する、あるいは楽しむ活動自体が、Co<sub>2</sub> 削減の観点から、地球環境をより身近に感じてもらえると思っている。

本日はオンライン開催だが、今後このような実施形態が当たり前の状況となってくると思う。むしろ、オンライン開催により、より全国フォーラムとして参加しやすくなり、あるいは録画もでき後から見ることもできるので、前向きに捉え、活動内容の情報交換が活発化できるのではないかと思う。

## ■来賓挨拶 2

**スピーカー：(一財)みなと総合研究財団 専務理事 丸山 隆英様**

来賓となっているが、事務局の一部を仰せつかっているので、そういった観点からも挨拶をしたい。

日頃より、海に親しむ活動を全国的に展開されている CNAC の皆様方に対し敬意を表したい。また、こういったコロナ禍においても、第 15 回全国フォーラムということで、どんな条件の中でもこういった会をきちんと開催していくという強い意志に対しても敬意を表したい。

今回のテーマが「With コロナ時代の海の楽しみ方」ということで、海に楽しむとは、今流に言うともしかしたら「不要不急」のことかもしれないが、このコロナ禍の中で、少し物の考え方が日本、また世界全体で変わってきていると思っている。コロナの前まではやはりグローバリゼーション、人や物が自由に移動できる中で、一番物売る人、買う人、これが偉いと。一番効率的にことを成す人が偉いというのが恐らく今までの考え方だったが、こういった状況下で、コロナのワクチンも出始めているが、仮にこれがスムーズに解決したとしても、またこういったことが起こらないとは限らない。そういった中で、我々は一体何を指すべきか、人の幸せとは何なのか、ということを変えて問われている。効率的に物売って物買ってということだけではなく、例えば災害に強い国なのか、あるいは環境に対してどういう認識を持っている国なのか、そういったことがすべての品格を決めていく時代になっていくと思う。

こうした中で、海に楽しむというのは、瞬間瞬間楽しいということだけなのかもしれないが、それが寄せ集まることで、我が国の格を決める、実は非常に重要な活動と考えている。もちろん、教育的な見地も重要だが、皆様の活動自体が 21 世紀のこれからの時代において国の格を決めていくような重要な活動という認識でいてもいいと思う。私どもとしても、こういった活動に対していろんな形でサポートしていきたいと考えている。今日はフォーラムということで皆さんの話を聞ける大切な機会と思う。実り多い議論となるよう願っている。

## ■全国海自慢 動画配信

### 発表順

- 1) CNAC 団体紹介
- 2) (株)沿海調査エンジニアリング 北海道
- 3) 野外教育事業所 ワンパク大学 東京都
- 4) NPO 法人国際海洋自然観察員協会(PACI) 東京都
- 5) マリンオフィスムーンベイ 神奈川県
- 6) NPO 法人千葉自然学校 千葉県
- 7) 北九州市立もじ少年自然の家 福岡県
- 8) NPO 法人国際自然大学校 沖縄校 沖縄県
- 9) エンジョイ部門（全国の海の仲間よりメッセージ紹介）

## ■グループディスカッション 第一部 「新型コロナ禍が海辺の体験活動に与えた影響など」

### ルーム1) コーディネーター：神保清司

- ・ すべての人が今回のコロナで活動に影響を受けた。
- ・ 沖縄の現状がどういう経過を辿ったのか具体的に聞いた。
- ・ 沖縄の陽性者数が増えて深刻な状況を経験している中で、情報収集をスピード感持ってやっていくことと、ガイドラインを策定し、適宜現状に合わせてマイナーチェンジし、保護者含め周りに向けてきちんと情報公開していく、という話が印象的だった。
- ・ 大学生をヨットに乗せる活動をしていて、東京でまたいつどうなるかわからない状況で、学生たちにヨットに乗る活動を動画で記録をすることを指示している。今ダメになっても、次の代に見せる動画を残している。また、通知アプリの COCOA アプリをインストールして活動に参加するよう指示している。
- ・ 第二部にもつながる話で、やれる対策はすべてやってきているので、次の楽しみ方の提案としてのウェブコンテンツの作り込みがこれから必要ではという話もあった。

### ルーム2) コーディネーター：小池 潔

- ・ 全体的に、今年の新型コロナ禍で海辺の自然体験活動や海辺の状況について話があった。
- ・ 体験活動施設の現状について。
- ・ それぞれの今年の海との関わりについての話。
- ・ いろいろな体験活動に関してのエントリーができない状況下で、学生との対面での活動は、感染に気をつけつつ実施している。三宅島の海辺の安全活動の一翼も担っていた。
- ・ 海自体での感染リスクは少ないのではないかと思われるが、その間の移動・宿泊で気を付けない

といけないのではという話があった。

### ルーム3) コーディネーター：檀野清司

- ・ 小学校に向けての活動もあった。4・5月は活動ができず、6月から再開。人数制限をしたり工夫をしながら活動をしている。
- ・ 4・5月できなかった分を6月以降のプログラムで実施していたり、夏休みが短くなったので、短い期間で実施しており、ばたばたしているという意見。
- ・ 宿泊施設なので、活動の戻りが少ない。来年についても不安が残るという話も。

### ルーム4) コーディネーター：池上正春

- ・ GWは基本的には海辺での活動が止まっていた。夏から順次再開。人数制限をして実施。
- ・ 途中の交通、移動手段について。バスを使えなかったり、普通は夜行のフェリーで移動するところを高速船を利用するしかなかった、など工夫が必要だった。
- ・ 普段の半分くらいの人数で活動した。
- ・ むしろ人数を減らさざるを得ない中で、子どもたちとの接点がより深まり、オペレーションが今まで多すぎたのではというところもあり、人数が減ってオペレーションしやすくなったところもあった。ポストコロナ、ウィズコロナ時代の参考になるのでは。
- ・ Zoomでシンポジウムを開催したが、Zoomでいろんな意見交換ができた。
- ・ コロナの機会を後ろ向きだけでなく、どうやって前向きに受け止めていくか、工夫の余地がある。
- ・ 海辺の活動を活発化させたい。

## ■グループディスカッション 第二部 「With コロナ時代の海の楽しみ方、提案など」

### ルーム1) コーディネーター：神保清司

- ・ Youtubeでの動物の飼育環境のバックヤードツアーの様子などを週一本上げている。それを収入に繋げていきたい。また、カニ、ワレカラなど、海の生き物のペーパークラフトをHPに上げて子どもたちがダウンロードして使えるようにしている。
- ・ 自然体験活動をツーリズムの切り口で見た時に、やはり少人数制、地域性を限定して、いわゆるマイクロツーリズムと言われるような範囲の中で展開していく。
- ・ 遊びに関わらず、仕事の仕方も変わってきている。大きな意味で価値の転換期を迎えている。
- ・ 例えばワーケーションという新しい形。オンラインを使い、田舎で、自然のそばで暮らしながら新しい提案が生まれてくる。
- ・ ヨットで、ワーケーションをして港を周って仕事ができるようになれば、という提案も。

### ルーム2) コーディネーター：小池 潔

- ・ 地元では家族、親子で活動に参加、恐らく移動での感染リスクは少ないはず。

- ・ 沖縄でのプログラムでは、ほとんどが県内からの参加。沖縄でも地域を跨ぐ移動には制限がある。ただし、公園など野外活動の場が閉鎖されていた関係で、海に沢山の人が来て、かなり密な状態になっていた。野外の活動ということで、他のところに行けない関係でも、海辺での活動への期待、ニーズ自体は多い。プログラムの内容についての工夫は必要だがニーズはある。
- ・ 海でも山でも密を避けるという点では人数を減らさざるを得ない。密に個々と関われる、というメリットはあるが、ビジネスで考えた場合、収入は減る。それを補う他の工夫が必要。
- ・ 海辺は3密を考えると感染リスクは少ない。様々な工夫をしたプログラムに期待している。
- ・ CNAC の元連携することでこういった活動を応援していきたい。

### **ルーム3) コーディネーター：檀野清司**

- ・ コロナの基本対策として、密を避けるために、団体の活動だったものを、人数制限を行い少人数での活動とした。参加者一人一人に目が届き、きめ細かい指導ができた。そういう点は良かったのではないか、という話。
- ・ 教育の現場(学校)では、今までは同じ釜の飯を食べて、一緒にお風呂に入って寝ることが自然体験活動のベースだったが、今はそういうことができない状況になってきた。そういう意味でも、団体から少人数に、また、時期も分けて分散化して対応することが必要になってくる。そうすると、みんなが同じ経験、というよりも、バラバラの経験になる。個人個人に焦点を当てた指導もできていくのでは。それはプラスの方向と言える。ただ、その時に、経験出来ない子を作らないということが大切で、学校以外でも家族などでも、体験を提供する工夫をしていくべき。
- ・ 情報量を提供する面では、ウェブなどの活用も必要になってくる。
- ・ 今までの団体から、少人数で対応することで、海の活動での本来の良さが出るのでないか。

### **ルーム4) コーディネーター：池上正春**

- ・ これからのウィズコロナの時代にどうやってやっていくのかディスカッションした。
- ・ 魚食普及ということで料理教室をしているが、今年は Zoom で実施。予め素材を送って、工夫して実施した。バーチャルな方向に進化させていく。
- ・ 学校教育との関連があり、食堂含め施設内でも密を避けるという意味で、今までにはない対応が必要。こちら側から動かないと学校側は積極的には動いてくれないので、提案型でやっていく。教育委員会の考え方にもアンテナを張り、何を求められているか、こちらから提案していかないといけない。
- ・ 家にいる時間が長くなり、Youtube を見る時間が増えた中で、Youtuber と呼ばれる人は自分自身の経験を Youtube に上げることをしている。海辺の体験活動も CNAC が Youtuber の一人となって、どんどん海辺の自然体験活動のすばらしさを発信していくべき。

- ・ 海あそび安全講座も、ウィズコロナ、ポストコロナ時代に合わせて工夫して実施しては、という意見も。
- ・ このきっかけをどう次の活動活性化につなげていくか、工夫が必要。

## ■まとめ

### スピーカー：NPO 法人海に学ぶ体験活動協議会 代表理事 三好利和

6月の日帰り活動から再開しているが、我々実践者がウィズコロナの中で何を考えるか。やはりまず実行していくことが使命で、そのためには何が必要かを考える。社会状況を考慮して、実行を諦める事ではなく、なんとか実行できることを目指していくことが必要と考える。

そういった中で、これから、第2部のディスカッションの中でもあったのは、新たなプログラム化の提案が出た。一つは今日のオンラインもそうだが、ウェブを使ったもの、あるいはバーチャルのものを活用して、実際の直接体験に繋げていく。段階としてそういったものを活用していく。それによって、参加者とのパイプをつないでいく。実際に活動に参加できる人は直接体験に来てもらう。それが心配な人とはそういったウェブ等を使ったところで繋がっておくことが重要。

分散型、小グループ化の話。自然学校側の立場から言うと、実施する内容は少人数でも大人数でも大差がないので、ある程度の人数が居た方が良いのは経営上避けられないが、その分岐点をどうするか、皆考えているところ。情報としては、CNACも加盟しているCONE：自然体験活動推進協議会、JON：日本アウトドアネットワーク、JEEF：日本環境教育フォーラムで4月から緊急調査を実施し、要望書、ガイドラインの形でまとめをした。次年度の文科省の予算に、体験活動に対する補助事業を、今年度同様に2021年度予算にも挙げてもらうよう、文科省環境省経由で今要望書を上げている。そういうことが皆さんの応援になればと考えている。

もう一つ、いろいろな方法がある中で、いくつかの方法を提案したが、さらに我々がやらなければならないのは、我々が実行するために必要なガイドラインの作成で、各団体で各団体の事業内容に合わせて作っていき、それを外部に示していくことが最低限必要で、当然ガイドラインの見直しも必要。そこに関わる職員やボランティアが、ガイドラインを守れるような研修活動も次には必要。いきなり現場に出てできるわけではないので、そうした積み重ねも必要。実際やってみてどうだったか、という見直し、総括も必要。そういったことを繰り返していき、次の段階に進むのか、同様な形を繰り返すのか、が必要。

我々の体験活動に関わる一つで、Goto事業があるが、国の施策を上手く活用していくことも必要。現在Gotoトラベル事業は現在1月末までだが、家族単位での行動が増えている現状があり、オートキャンプ場に家族で行くこと、また、オープンスペースで楽しむ人が明らかに増えている。バス旅行ではなくマイカーが増えている。関東では高速道路が10月、11月混んでいた。こういったGotoト

ラベル事業を活用して動いていく。動いた先で、皆さん何を期待しているのか、海辺の体験活動だけではないが、自然との触れ合い、逆にウィズコロナの状況で、感染の可能性が低い自然の中での余暇を過ごしたいというニーズが増えているのは明らか。そういった形で、ある程度集団を対象にしていた活動を、小グループ、あるいは家族単位の活動を対象とするものを作っていくことも必要。半面、青少年施設などでは、団体の扱いには慣れているが、どういう風に受け入れていくか考えていくしかない。それぞれの施設の特徴を生かしながら、あるいは改善しながらどうやっていくのかという方法論を見つけてやっていく。

最後に、「ウィズコロナでも、体験活動を止めるな！海辺に出かけることを止めるな！」ということとで私たちができることを考えて、今しばらく我慢をしながらも頑張っていきたい。

今日は、北海道から沖縄まで、画面上ではあるが状況を共有し、意見交換できたことは貴重な時間だったと思う。今後も、CNACとしても場づくりをしていければと思う。

#### ■閉会の挨拶

**スピーカー：NPO 法人 海に学ぶ体験活動協議会 副代表理事 神保清司**

今回初めてウェブでの全国フォーラムになった。ウェブを活用したミーティングに慣れてきたこともあり、こういうことが普通にできる時代になったと思うし、通常東京などで開催するときにはやはり物理的な距離があり中々お会いできない方も多くいるが、こういう手法を使うと、久しぶりの方にも会えて、それもウェブを使うメリットとを感じる。実体験主義を通してきた我々だが、不思議なことにウェブで会ったら普通に会った気にもなる。こういった技術も使いながら、今後はCNACの活動を続けていきたい。

先ほど代表の三好からもあったが、様々なことが変わり、価値が変わっていく中で、今日参加いただいている皆様にもお願いしたいのは、海に関わる活動、自然体験活動に少なからず関わっている大人たちには、自然の中に出かけていくことで、海辺に身を置くことで、心も身体も丈夫になるんだ、それで免疫力を上げて、病に負けない身体を作るんだ、と声高らかに、世の中に対して謳っていく責務があると思う。なので、気を付けつつ、対策を取りつつ、自然体験活動の火を消さないためにも、本来海辺に遊びに行きたい子どもたちもたくさんいるので、その子たちの道を閉ざさないためにも頑張っていかなければいけないと思っている。

ぜひ今後もこういった場で皆さんと意見を交わすことで、自分ひとりで苦しい思いをしている気がどうしてもしてしまうが、皆さんと話すことで、一人じゃないな、全国にたくさん仲間がいるなと感じる事ができるので、ぜひそのネットワークを生かして、勇気にして、また活動に邁進していただきたいと思う。



参加者の皆さんと・・・

(了)